

## 1139 保健医療福祉系学生の専門職に対するアイデンティティの学年による変化(第2報)

藤縄 理, 久保田章仁, 谷谷義旦(OT), 水野智子(Ns), 朝日雅也, 井上和久, 磯崎弘司, 田口孝行, 西原 賢, 丸岡 弘, 原 和彦, 高柳清美  
 溝呂木忠, 江原皓吉, 細田多穂  
 埼玉県立大学保健医療福祉学部

**key words** 専門職アイデンティティ・横断的分析・縦断的分析

【目的】専門職アイデンティティに関する学年ごとの横断的変化と1期生の平成12年からの縦断的変化を比較し昨年の本学会で報告した。その結果、横断的分析でも縦断的分析でも1年次はアイデンティティ評価の点数が高く、2-3年次で低下し4年次で幾分高くなる傾向があった。今回は平成15年後期における在校生のアイデンティティの変化を横断的に、1期生と2期生の特性を縦断的に比較分析した。

【方法】横断的分析の対象は平成12年度から15年度の入学生で、平成15年12月に在学していた編入学生を除いた看護学科320名、理学療法学科91名、作業療法学科84名とした(有効回答率:看護47.5%、理学60.4%、作業61.9%)。専門職に対するアイデンティティは「専門職のアイデンティティ尺度」10項目について項目ごとに「非常にそう思う」5点、「そう思う」4点、「どちらともいえない」3点、「そう思わない」2点、「全くそう思わない」1点の5段階で評定を求めた。横断的分析として質問項目ごとに各学年の結果について比較した。また1期生、2期生の縦断的分析も同様に行った。

【結果】横断的分析では、10項目中9項目で1年次が最も点数が高く、2年、3年と学年が進むにしたがって低下し、4年次で少し上昇する傾向があった。統計学的に有意だった項目は「もう一度学科を選ぶとしたらまた『専門職』の学科を選ぶ(選択)」、「自分が選んだ『専門職』の仕事に誇りを持っている(誇り)」、「もっと『専門職』についての勉強がしたい(勉強)」、「今の『専門職』の道を選んだことに満足している(満足)」、「将来『専門職』として仕事することに自信がある(自信)」、「もっと今選んでい

る『専門職』の技術を磨きたい(技術)」の6項目であった。1期生、2期生の学年による変化をみると、やはり1年次が高く、2年次、3年次で低下し、4年次で少し上昇する傾向があった。しかし、有意差が生じた項目は1期生では「選択」、「満足」、「自信」の3項目であったが、2期生では「『専門職』の仕事将来長く続けたい(将来)」、「『専門職』の仕事に私は適している(適性)」、「先輩に相談されたら今ならうとしている『専門職』を勧める(勧誘)」、「『専門職』の仕事は自分の能力を生かせる(能力)」と「勉強」、「満足」、「技術」の7項目であった。さらに2期生は1期生に比して1年次の点数が高く、2-3年次で極端に低下する傾向があった。

【考察】横断的分析と縦断的分析のいずれでも1年次の点数が高いのは専門職アイデンティティが確立しているからではなく、専門職の勉強に対する希望や期待の現れである。2-3年次で専門の勉強を続けるに従って専門職になることに対して不安を感じて点数が低くなったと推察できる。そして、4年次で点数が上昇したのは臨床実習を通じて専門職アイデンティティが徐々に確立されつつあることを示していると考えられる。

## ■ 教育・管理系理学療法 8

## 1140 コメディカル人体解剖実習教育全国調査

与那嶺 司<sup>1)</sup>, 内野滋雄(MD)<sup>1)</sup>, 高田治実<sup>1)</sup>, 中屋久長<sup>2)</sup>, 高橋輝雄<sup>3)</sup>, 河上敬介<sup>4)</sup>, 山元総勝<sup>5)</sup>, 奥村チカ子(OT)<sup>5)</sup>, 溝田康司<sup>5)</sup>, 富永 淳<sup>6)</sup>  
 奥村好誠(OT)<sup>7)</sup>, 田中利昭<sup>7)</sup>, 加藤宗規<sup>3)</sup>, 江口英範<sup>1)</sup>, 黒澤辰也(OT)<sup>6)</sup>

1) 臨床福祉専門学校, 2) 高知リハビリテーション学院, 3) 東都リハビリテーション学院, 4) 名古屋大学医学部  
 5) 沖縄リハビリテーション福祉学院, 6) 札幌リハビリテーション専門学校, 7) 第一リハビリテーション専門学校

**key words** 人体解剖・教育・調査

【目的】臨床福祉専門学校では全国の理学療法士・作業療法士(PT・OTと略記)養成校教員の有志を集め、文部科学省の委託事業として「コメディカル教育における人体解剖実習の本格的導入に向けての養成校側の準備体制整備」事業を行なった。その事業の一環である調査の結果を報告する。

【方法】全国PT172校、OT養成校161校への郵送によるアンケート調査。解剖学会のコメディカル教育委員会が実施された調査を参考に質問紙を作成した。

【結果】平成16年11月9日段階でPT:95校55.2%、OT:76校47.2%の回収率である。剖出実習を実施しているのは、PT養成校で29.5%、OT養成校で25%であった。未実施の養成校でもPTで97%、OTで93%は剖出を伴う実習を希望し、見学のみの実習で十分とする養成校を大きく上回っていた。実施している場所では近隣の国公立あるいは私立の大学に依頼していた。実施している学年は1年次が両学科ともほとんどであるが、複数学年にわたる養成校も多く見られた。実習期間は1日のみがPTで53.6%、OTで36.8%と多く、期間が不十分であると答えている。実習前のオリエンテーションとしては「生命あるいは医の倫理」や「篤志献体についての説明」が両学科とも全校で行なわれていた。養成校教員のトレーニングに関しては、実施校のほとんどが「死体解剖資格」を取れるように研修すべきと考え、未実施校の多くも解剖セミナーへの参加経験者あるいは資格者が実習補助をすべきと考えていた。慰霊祭への参加を実施している養成校はPTで25%、OTで42%のみであった。不参加校の理由は「機会が与えられない」「大学の意向で不参加」などであっ

た。解剖実習を行っていない養成校でもPTで78.5%、OTで81%が解剖実習を実施するなら慰霊祭には参加すべきと答え、その他と答えた養成校も、「他のコメディカルと歩調をあわせる」「大学の判断」などとしている。卒後の人体解剖実習はPTで74.7%が必要と答え、不要は11.6%であったが、OTでは必要とした養成校が55.3%、不要とした養成校も27.6%あった。PTとOTの人体解剖実習に対する対応の違いを表す結果となった。【考察】剖出を実際に実施している養成校も3割近くに上り、未実施校でも9割以上が希望していたが、篤志献体によって成り立っている人体解剖実習でありながら慰霊祭への参加校は少なかつた。自由記述のコメントから大学への配慮やコメディカル教育全体の動向を伺っている状況が考えられた。PT養成校の7割が卒後の解剖実習を必要としていたのに対しOTは6割弱と少なかつた。PTとOTの人体解剖実習に対する対応の違いを表す結果となった。